

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520366

研究課題名(和文) アフリカの草の根の女が著すエイズの物語

研究課題名(英文) Stories of HIV and AIDS Written by Grassroots Women in Africa

研究代表者

大池 真知子(OIKE, MACHIKO)

広島大学・総合科学研究科・准教授

研究者番号：90313395

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：HIV/エイズに関する社会運動の一環として、アフリカで草の根の女たちが書いている文章を分析し、HIVの経験を女たちがいかにとらえ、書くことでいかに自己と社会を変革しているのかを考察した。ライフストーリーの聞き書き集では、語り手と書き手にギャップがあるため忠実な再現は困難であり、むしろ創作的な要素を含む「クリエイティブ・ノンフィクション」の手法が有効だと分かった。女たち自身が書くライフストーリーでは、母親が子どもに宛てて書く家族の記録「メモリーブック」が、家族が生き抜くのに有効であることが分かった。

研究成果の概要(英文)：The project analyzed the texts which African grassroots women write as a part of social movement of HIV and AIDS in Africa, and examined how they understand their living with HIV and how they transform themselves and people around them through writing.

First, in terms of their life stories written by activists and journalists, the gap between the narrator and the writer often precludes their voices from being heard. The creative non-fiction, which allows the writer to create a story based on the narrative, proved to be an effective way of representation. Second, in terms of the life stories written by the grassroots women themselves, the memory book, in which a mother writes for her child her history, the family background, and the stories of the child, proved to be an effective tool to support the family to survive with HIV.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：アフリカ文学

### 1. 研究開始当初の背景

アフリカの HIV / エイズについての研究は、80 年代に生物医学の分野で始まり、90 年代には社会科学の分野でも行われるようになったが、人文学の分野での研究は遅れていた。しかし 2000 年代に入って、性にまつわる情緒や自意識の側面から性の制度を考察し、人が性のイデオロギーをいかに内面化し、行動に表し、アイデンティティを構築するのかを明らかにする必要性が指摘されるようになり、現在、人文学的視点からの研究が行われつつある。

一方で、アフリカでは現在、エイズをテーマにしたテレビドラマ、演劇、小説などが多く発表されている。これらの作品は、エイズにまつわる人々の情緒を反映すると同時に、それを形成していると思われる。研究代表者はこれまで、「ガーナにおける HIV / エイズ演劇についての研究」や「社会運動としての文学 アフリカの HIV / エイズと小説」といった研究課題を通じて、アフリカの映画、演劇、小説が表象する HIV / エイズを分析するとともに、その受容を考察してきた。それらの研究の過程で、HIV / エイズの啓発活動や HIV 陽性者の支援活動の一環として、草の根の人々、とくに女たちが HIV / エイズの経験を文章化する活動が、さまざまな形で行われていることが明らかになった。

その結果、草の根の女たちが書いた HIV / エイズの物語を読み解くという本研究課題の着想に至った。

### 2. 研究の目的

本研究課題では、HIV / エイズの社会運動の一環として、草の根の女たちが HIV / エイズの経験を著す活動を分析し、女たちがいかに性を表現しているのか、そして性について書くことで女たちがいかに自己と社会を変革しているのかを探るのを目的とした。

### 3. 研究の方法

草の根の女たちの経験を文章化した作品をテキスト分析するとともに、執筆の背景や出版の過程などについて聞き取り調査を行った。

分析した著作物は 3 つに分けられる。

(1) 活動家やジャーナリストが、草の根の女たちの経験を聞き取ってライフストーリーとしてまとめる聞き書き。これらはさらに 3 つに分けられる。聞き取った内容を、引用を交えながら書き手がレポートするもの。語り手は三人称で言及される。語り手が一人称で語る形で、語り手のライフストーリーを再現するもの。書き手は文章中には表れない。「クリエイティブ・ノンフィクション」すなわち、聞き取った内容をもとにして、書き手が創作を交えながら物語化するもの。

(2) 草の根の女たち自身が書くライフストーリー。とくに「メモリーブック」に注目した。メモリーブックとは、親(たいていは母親)が子どもに宛てて、家族の歴史や親自身の半生、子どもの生い立ちなどを書く小冊子である。書き手たちは支援団体が主催するワークショップに参加して、たがいに助け合いながら執筆する。冊子は 30 程度の項目に分かれており、書き手はそれらの項目に記入して冊子を完成させる。私的な冊子であるため出版はされていない。

(3) 草の根の女たちが自身の経験をもとにして創作するフィクション。創作のワークショップで執筆する。自身や知人が経験した内容をフィクション仕立てで語るものが多い。

なお、本研究課題では、(1) と (2) を中心にした。(3) は実施団体とコンタクトが取れなかったため、テキスト分析をするにとどまった。

### 4. 研究成果

(1) 本研究課題で明らかになったことと、(2) 前研究課題の成果と合わせて著作にまとめたことの二つに分けて記述する。

(1) 上記の 3 種類の文章について、それぞれ

れ次のことが明らかになった。

#### 聞き書き

聞き書きの物語において、書き手は知識人階層であることが多く、語り手本人との隔たりが大きい。この隔たりにいかに敏感で、それをいかに文章化するかが、物語の説得力につながる。

書き手が語り手の言葉を引用しながら、語り手のライフストーリーを紹介するタイプの文章では、語り手が語った言葉そのものを読むことはできるものの、その言葉がいかに語られたかは十分に表現されないことが多い。直接引用の分量はたいてい少なく、大半は、書き手が語り手の言葉を要約したり説明したりする文章が占める。そのため、読者は語り手の経験に寄り添うことが難しい。たとえば『28 アフリカのエイズの物語』(Stephanie Nolen)がそれにあたる。

一方、語り手を一人称で言及してライフストーリーをまとめるタイプの文章では、読み手は語り手の物語の世界に入り込むことができる。しかし、書かれた物語が、じっさいに語り手が語った言葉とどのように隔たっているのかは明瞭でない。物語がどのように語られたかも分からない。たとえば『よみがえる女たち アフリカの女たちの闘い

HIV / エイズと財産喪失からの再生に向けて』(Izumi Kaori)がそれにある。

しかしなかには、ある人物の人生について複数の語り手に語らせ、それに写真など別のメディアを組み合わせることで、経験を多層的に表現することに成功しているものもある。たとえば『壊れた風景 アフリカの HIV / エイズ』(Gideon Mendel)である。

他方、「クリエイティブ・ノンフィクション」は、語り手のライフストーリーを素材として、書き手が創作的な要素を加えて物語化したものである。ウガンダの女性作家団体「フェムライト」は、そのような取り組みを

行っている。一冊のクリエイティブ・ノンフィクションの物語集には、さまざまな書き手がそれぞれの方法で物語化したライフストーリーが複数収録されており、その多様性が力となっている。なかでも、語りの内容ではなく、語りのイベント自体を物語化した作品は、語り手の想い、書き手の想い、語りの情景などが細やかに描写され、喚起力がある。『あえて言う HIV / エイズとともに前向きに生きるウガンダの女たち 5 人の証言』(Suzan Kiguli and Violeto Barungi, eds) は HIV / エイズの経験に絞ったクリエイティブ・ノンフィクションの聞き書き集であるが、ほかの聞き書き集にも HIV / エイズの語りが収録されている。

ただし、「フェムライト」でのインタビュー調査を通じて、語り手の参加度を上げる必要が感じられた。現在、聞き取り後の執筆や編集は書き手に任せられ、語り手は参加しない。語り手にフィードバックを組織的に行うことで、書き手と語り手が学びあい、書き手は責任を果たすことができると思われる。

#### 当事者が書いたライフストーリー、とくにメモリーブック

HIV とともに生きる草の根の女自身のライフストーリーは、啓発イベントで口頭発表するタイプのものが多く、文章化されたものはきわめてまれである。「メモリーブック」は貴重な例外である。

研究を通じて 25 冊のメモリーブックを読解するとともに、書き手、読み手、ワークショップの運営者にインタビューした。その結果、以下のことが明らかになった。

#### [ 執筆の効果 ]

メモリーブックを書くことは以下のような働きがあることが分かった。

第一に、書き手が自分の半生、とくに HIV に感染した事情や闘病について書くことで、自分の病を意味づけ、病をコントロールし、

みずからをエンパワーすることができる。

第二に、書き手が子どもに宛てて書き、文章を子どもと共有することで、子どもをエンパワーすることができる。子どもをエンパワーすることは、親である書き手の大きな喜びとなる。そして HIV を抱えながら家族みな協力して、前向きに生きることが可能となる。

また、執筆は、HIV 陽性者の活動団体を対象にしたワークショップをつうじて行う。したがって三つ目の効果として、HIV とともに生きている地域の女たちが助け合って執筆し、一つのプロジェクトを修了することで、活動団体としてエンパワーされることが挙げられる。

さらに、執筆のワークショップは、農業技術や経営技術のワークショップと組み合わせられることもある。したがって四つ目の効果は、参加者が広い意味で家族の将来を計画することを学び、生活の向上を実感することである。

#### [メモリーブックの内容]

メモリーブックは次の3つに分けられることが分かった。死を目前にして書かれたもの、快復後に書かれたもの、病みながら書かれたものである。

死を目前にして書かれたものは、病を克明に記す場合もあれば、それを避けて一言も触れない場合もある。快復後に書かれたものは、サバイバーの語りをなぞることが多い。病みながら書かれたものは、病をたどり、快復を記述しながらも、つねに死を意識する語りが見られる。

#### [今後の課題]

ワークショップの詳しい内容や、参加者の協力の仕方など、まだわからない点も多い。協力の仕方を知るためには、それぞれのメモリーブックを一冊の作品として単体で読むだけでなく、複数のメモリーブックの同一項目を相互に参照しながら読むことも重要だ

ろう。今後さらに研究を進めていきたい。

創作した小品（短篇、詩、寸劇、歌など）いわゆるサバイバーの語りをなぞるもの、教訓を強調するものも多いが、なかには、情景を描写することで情緒を喚起する作品もある。作品集には『私たちは生きることを選ばなければならない ナミビアの女たちが書く文化と暴力と HIV / エイズ』（Elizabeth IKhaxas, ed）などがある。

(2) 本研究課題と、これまでの二つの研究課題の成果を合わせて、単著『エイズと文学 アフリカの女たちが書く性、愛、死』（世界思想社）にまとめた。著書は3部構成になっている。

第1部では、研究の背景を論じた。第1章では理論的な背景として、性科学、ジェンダー研究、アフリカ文学研究の各学問分野で、アフリカの性と HIV / エイズがいかに論じられてきたかをたどった。第2章では実践の背景として、アフリカの HIV / エイズの運動で応用されるテレビドラマや演劇、さらには教材読本や公募作品集などの文学の実践を紹介した。

第2部では、草の根の女が語るライフストーリーについて論じた。この第2部に本研究課題の成果が直接反映されている。まず第3章では、聞き書き集を再現の形式別に分析した。第4章では、メモリーブックの執筆状況について論じ、第5章ではメモリーブックのテキストを分析した。

第3部では、小説を分析した。第6章では HIV / エイズを扱うアフリカの小説を概観し、第7章ではボツワナのヤングアダルト小説、第8章ではウガンダの純文学小説、第9章ではガーナの大衆的な小説を取り上げ、セクシュアリティの表象を分析した。

アフリカのエイズを扱う研究は数多いが、本著書は、それを文学的なアプローチで行う

ことで、人々の情緒を明らかにした点が評価された。とくに、運動の語り、草の根のライフストーリー、純文学作品という3つのジャンルを横断的に論じることで、言説の全体像を明らかにした点が評価された。なかでも、メモリーブックという草の根の文章を発掘し、それを文学的に読み解いた点が評価された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

大池真知子、エイズと自伝 アフリカでHIVとともに生きて書く、人間文化研究、査読有、6号、2014年、20-41頁  
大池真知子、アフリカのHIV/エイズ小説が表象する性と身体の政治学 アマ・ダーコの『花なしでなく』分析、多民族研究、査読有、4号、2011年、89-119頁

〔学会発表〕(計2件)

大池真知子、アフリカの母親たちが書く家族の記録、日本英文学会第84回大会、シンポジウム「ことばと共同体 グローバリゼーション下の想像力」パネリスト、2012年5月26日、専修大学生田キャンパス  
大池真知子、エイズとともに生きること、エイズについて書くこと ウガンダの『メモリーブック』お茶の水女子大学英文学会第2回年次大会、2010年11月20日、お茶の水女子大学

〔図書〕(計1件)

大池真知子、世界思想社、エイズと文学 アフリカの女たちが書く性、愛、死、2013年、総312頁

〔その他〕

テレビ番組出演

大池真知子、アフリカの母が語るエイズ、視点論点、2013年12月3日、NHK総合4:20-4:30、Eテレ13:50-14:00

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

大池 真知子(OIKE MACHIKO)

広島大学・大学院総合科学研究科・准教授

研究者番号：90313395

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：